

山村さんは地下が好きだという。事務所はビルの四階と五階で、もちろん地下室はない。だから、と言う代わりに、パーティションの中を黒っぽい紙で埋め尽くして、PCの画面も黒地に白文字にしている、トーンが統一されている。どんなに物覚えの悪い新人も山村さんのことだけは一度で覚える。宴会で、なんで地下のある会社に入らなかったんですかと聞いてみた。

「だって、ソフトハウスってほしい三階より上にあるじゃない？ 地下ってほしいバーとか喫茶店で、そういうところは好きじゃないんだよね、それに、俺が水商売やれると思う？」

即答だった。思わず笑うと、山村さんには山村さんなりの理想があるらしく、それは潜水艦なのだという。

「ガランとしたとこじゃなくて、囲まれていたんだよね」

そんな山村さんは、昼飯もたいてい一人のようだと、漠然と思い込んでいた。その日、たまたま一人で外に出て、居酒屋のランチが安くておいしそうなので入ってみた。カウンターの奥に、山村さんと花岡さんが並んでいる。入り口すぐの席に座りながら、目が合ったので軽く会釈した。山村さんが最初に、続いて花岡さんが軽く微笑んで、二人はまた食べながら真顔で話している。あまり笑わない二人だ。

鯖味噌定食を食べながら午後の予定を考えていると、お先に、と声をかけられた。食べている最中だったので、飲み下そうとした。

「いいから、ゆつくり」

山村さんと花岡さんが笑っている。少し会釈してから食べ続けた。入社した頃にはもう中堅バリバリだった二人が並ぶと、やっぱり少し緊張する。お吸い物でご飯を飲み下した。二人にもう一度目を向けると、山村さんがお釣りを受け取っていた。脇に抱えたオレンジ色が目を引いた。

大きく「繭玉」とタイトルが見える。橋本、という名も確かに見えた。

明らかに何かの冊子か、同人誌みたいだ。マンガか何かか。それにしても二人の外見同様に地味。

なんだかそれ以上はいけない気がして、そのまま鯖味噌に戻って最後の一切れを口に入れた。なんだか調子が狂うなと思っていたけど、ここに来るときはいつも一人なのに、たまたま人に会ったからなのかもしれない。

給湯所は昼食後にごった返す。午後二時頃、ピークを外してお茶をいれに立つたら、山村さんがいた。グレーのシャツに黒いジーンズ。裾は必ずジーンズに入れて、決してスニーカーは履かない。外ではこれにジャケットを羽織る。太陽が東から昇るように、同じスタイル。潜水艦スタイル、と呼んでいる。

先に紅茶をいれていた山村さんが口を開いた。

「紅茶だった？ 一人分しかいれなかったけど」

「いーえー、アイスコーヒーなんで」

山村さんはティーサーバからゆっくりカップに注ぎ出した。

「そーういや珍しいね。あーいうお店、行くんだ」

「そーうでもないですよ？ たまーに。本を買う時なんか」

そのまま言葉がとまった。お茶の最後の一滴が落ちていく。コーヒーメーカーがほこほこ呟いていく。

「そーういえばさつき、なんかオレンジの見たことない本、持っていましたね」

話すつもりだったわけじゃない、のに、口が動いていた。自分でちよつとびっくりして、その目を

山村さんにとらえられた。

「ん？ ありや、カタログだよ」

「繭玉とかって、おつきく出てて。同人誌みたいな感じの」

ここまで来たらええい、としやべってしまふ。山村さんの目が一瞬、こちらを避けた。